

PCSA RSNを訪問し、ぱちんこ依存問題の対応状況を視察 ベストを尽くすという意識で連携

一般社団法人パチンコチェーンストア協会谷口晶代表理事/略称・PCSAは3月11日、特定非営利活動法人リカバリーサポート・ネットワーク(西村直之代表/略称・RSN)を視察した。

今回の視察の目的は、RSN活動の財源的な支援要請を受け、実際にどういった活動なのかを現場訪問を通じて、検討の資料とするため、沖縄に赴いた。

谷口代表をはじめとした、会員有志総勢14名は、那覇空港で午後1時過ぎ集合し、チャーターバスに乗り込み、午後1時30分過ぎに出発。車中では、今一度RSN設立経緯を含めた再確認をおこなった。

午後2時25分過ぎ、リカバリーサポート・ネットワークのホームページにある玄関の写真と同じ入り口前に下車した。ちょうど相談者からの電話相談中という、緊張した雰囲気にも遭遇しての訪問となり、全員、しのび足で代表の西村氏、事務局の横山氏とあいさつを交わした。

これまでの電話相談が記録された相談受付票のファイルについて、閲覧。その後も相談電話があり、約30分ほどであったが、実際の相談現場を体感、具体的な質疑応答については、会場を移した。

電話相談の対応が終わる、夕方、沖縄市内に場所を移し、質疑応答をおこなった。

「リカバリーサポート・ネットワークの設立経緯」

子どもの車内放置事故・熱中死事故、借金問題などはちんこの周囲で生じる問題に対し、全日本遊技事業協同組合連合会(略称・全日遊連)は、2003年4月に「依存症研究会(現在、ぱちんこ依存問題研究会)」を発足した。

これらの問題の背景の一因となるぱちんこ依存問題に注目し、研究会では、強迫的ギャンブルの回復支援施設「ワンデポポート」から当事者活動の考えを聴くなど、広い視点からぱちんこ業界として具体的に何ができるか議論と検討を行った。

研究会の議論の中から、真に役立つサービスと未来に向けた社会資源の創造への取り組みを目標に、相談機関の設立が構想された。その構想のもと、全日遊連の支援によって5年間の財源支援のもと2006年4月に第三者機関ぱちんこ依存問題相談機関「リカバリーサポート・ネットワーク」を設立。医師の西村氏をRSN代表として選任。また、2009年10月には特定非営利活動法人

の認可(沖縄県)を受けた。

RSNの主たる事業は、パチンコ・パチスロへの過度ののめり込み(依存)問題に特化した電話相談。RSNの電話番号を記したチラシは、全日遊連傘下ホール店舗に備え付けの理解と協力呼びかけを続けている。相談件数は着実に増加、ホールに備え付けのチラシを見たという相談者を含め、全国各地から相談が寄せられている。スタート時は、電話相談事業だけだったが、現在では、援助職・サポーター養成講座の企画・開催、厚生労働省の班研究への参加、自殺対策防止プロジェクトへの協力、男女共同参画センター相談員のスーパバイズなど、国内唯一のパチンコ依存関連問題の相談専門機関としての知見を社会に役立てるよう取り組みを行っている。

■RSNについての質疑応答(主なもの)

PCSA 先ほど事務所で見せていただいた相談記録の資料を拝見していると、借金の欄に印が多く見受けられた。6月から新法改正貸金業法が施行され、貸出し制限が強化されることで、サラ金企業は大変だが、それが今後どういった影響がでてくるのか、予測できないとさえいわれ

ているが。

西村 改正貸金業法の影響は、予測できないと思う。約4年間の電話相談の内容などからみると、RSNに電話相談してくる方というのは、適正な範囲で遊んでいて、ちょっと踏み外して、あわてて電話する、というケースが多い。サラ金などで5000円、1万円を借りて、それを繰り返し返すというパターンが多く見受けられる。表面上だけかもしれないが。

電話相談からでは、お金がなくなつたので、1円パチンコに移行した人はいる。しかし、1円パチンコだけを遊ぶ人で、借金問題をかかえているという問題はでない。これ低貸玉営業は、きわめて良い環境営業形態だと思われる。しかし、今後、それが100%のめり込みの問題が出ないということではないと思う。長時間遊ぶ中で、何か問題が起これるか、起こらないのか。今年から、1円・4円という貸玉についても、相談集計の項目に入ればはじめた。

PCSA パチンコ遊技を提供する我々業界として、のめり込みという問題と向き合い、対応していかねればいけないと思う。これまで通り、西村先生のRSN(沖縄)に頼っているのか。それとも今後の方向性として、たとえば全国に同じような相談機関を設けていくことも必要なのか。たとえば東京に出先機関の必要はな



RSN事務所を訪問

いか。

西村 依存問題に対しては、唯一、業界の方々が声が上がって、何とかケアしなければという、いままでも取り組みが育ちつつある。私が経験した中で、はじめて、希望のもてるケースになりつつある。依存問題のめり込みについての連携した対応は、これまで国内では立ち遅れてきた。個々に認識がまちまちであり、まずは、正しく理解してもらえよう。環境づくりが必要。活動をスタートさせてまだ4年ほどだが、まずは地道に依存問題への認知を、(業界内そして)大衆に向けて、正しい理解を普及させていくことが大事だと思う。その中で、ある一定の成果にしていければいいと思う。ようやく、のめり込みという問題について、「本当のデータ」がとれるようになってきたことは大きな前進。急いで成果を求め過ぎると、センサーショナルに取り上げられかねない。規制強化、あるいは悪者扱いにつながるなど、理解する前に過剰反応が懸念されるからだ。のめり込みの問題だけが独り歩きすることで、全国各地にある小さな町の小さなパチンコ店の存在がなくなるようなことがあってはいけない。唯一の娯楽として期待している人たちの楽しみの灯をともし続けていただくことが、大事だと思う。

PCSA お話をうかがうほどに、先生のボランティアに徹した姿勢を感じるが、財政支援はもちろん、その他に業界ホールとして、支援協力できることを教えて欲しい。

西村 一番は、活動資金が潤沢にあれば何とかなると思われれるかもしれませんが、しかし、今の切なる願いは、相談電話が円滑につながる、(それには相談員が)電話に対応できるようにすること。そのためには、すべてのパチンコ店にRSNの相談先がわかる電話番号が載ったチラシを貼ったり、置いてもらえること。そして、忙しい時期、暇な時期ともに安定して電話が受けられるような環境になることです。RSNの存在が全国のホール(まず業界内)で認知されることが先決。今回の件でも、全部の団体をひとつひとつ私が頭を下げて回るのが筋だと思っています。小さいけれど、地方だけでも、ちゃんと活動して広がっているということ、是非、業界内の方々から知っていただければ幸いです。

PCSA 業界と連携した橋渡し役としてワンデーポートの活動があるが、このワンデーポートという言葉の由来は、何でしょうか。

西村 当事者の活動において、やめるといつかの終わり終止符を打つ判断はない。パチンコがしたくても、遊ぶ金がなければ、たとえば次の給料日までであれば1ヶ月で遊ばないだけ、お金が入ればまた、遊ぶ。今、スイッチが入れば、止まらないというような重度ののめり込みの人が、ワンデーポートに行き、何とか今日一日我慢してみようという活動。一日過ぎれば、またもう一日

我慢してみようという、積み重ね。その積み重ねて努力していこうというアプローチは、薬物もアルコールもギャンブルも同じ処方。やめさせることが目的ではなく、自分で決めること。するしないを自ら選びましょうということであり、それは個人の自由であるという姿勢。

PCSA 私ども組織は、チェーンストアという活動を通じた会員の集まりです。一番大事なことは、お客様の目線、消費者の立場に立つて業界を変えていこうということが、活動指針です。業界の利益を追求しよう、守ろうということではない。事務所、相談の調査票を見ていたら、パチンコ営業はしてはいけないということなのかと、パチンコを提供する経営者として感じられさへした。西村 パチンコ業界が、これはものすごいパワーと魅力を持っている証ではないか。1日数千万人の人がアクセスしている。総理大臣の支持率が下がると、実際に辞任に追い込まれたりする。それと同じ位に、悪いイメージやニュース報道でマイナスイメージな事件が垂れ流しされているのにもかわらず、依然として、参加している人が、3000万人から半減したと言われても、支持されていることに変わりはない。すごい数字。いうなれば、社会資源「巨大な社会施設」ではないかと思う。

人間は、成長するにつれ、社会に出ていかなければいけない。日々、苦悶している中で、社会に孤立しない、一息いれることができる場所が必要。日本のこれまでの政策では、どんどん取り上げていっている。そのことに気付いていけば、今後パチンコは日本にとって、大きな財産(社

会資源)になると、認識されていくと思う。

PCSA ホール経営しているが、最近の遊技では、パーソナルシステムという名前に代表される玉箱を運んだりしなくて良いシステムが出てきて、便利になっていく。しかし、今のお話を聞いていくと、その玉箱の業務がなくなったことで、お客さんとのコミュニケーションをもっと積極的にする機会づくり、新しいサービスを創り出していく機会にしたい。

西村 そろそろ高齢化社会、少子化も含めて、社会が変わりはじめていく。大衆もそろそろ気がつきはじめて、コミュニケーション含めうまく機能させていかなければいけない。社会全体で関心を向けさせなければいけない共存共栄の時期にきていると思う。ホスピタリティ(Hospitality)ということばを福祉関係含め、サービス業でもよく使われている。しかし、その語源のひとつとされている中に「Hospitality」(敵対する)という言葉がある。それが、戦争対立する中においても、敵味方の区別無く、自傷した人を助けるといっても、概念的には、ものすごく敵対する中でこそ、本当のホスピタリティが生まれるのではないだろうか。社会との摩擦を隠そう隠そうとするのではなく、オープンにしていこうと思う。

PCSA 本当に有意義な話し合いができたと思います。そこをお願いですが、5年間の総括、分析、そして課題、目標をまとめ、発信して欲しい。たとえば、5年後の目標は何か。ゴールは何か。たとえば

全国出張面談、諸外国の研究データ資料を踏まえたパチンコ依存データの研究整備など。業界が連携してRSN支援に参加する団体が増えるためには、より明確な目的と目標を自ら打ち出して欲しい。

約1時間半のディスカッションとなり、その後は親睦会をおこなった。谷口代表理事は、

「私たちは、国民の視点、お客様の視点に立つて、もういちど取り組んでいかなければならないと、あらためて痛感した。事務所におうかがいし、電話のベルが鳴るたびに、それは私たちにどうして大事なお客様が、悩んだ末に電話して来られたのだと思うと、胸が詰まった。のめり込みという問題を実感する機会としても大変に貴重だった。今日、事務所におうかがいしなければ、通り過ぎていたかもしれない。膝を交えて、お話しして、共感できたことは大きな喜び。第三者機関として一定の距離感を保ち、さらに飛躍の時としていただきたい」として視察研修の意義と出会いに感謝して閉会した。

また、有志のひとり佐藤洋治経営アドバイザーからは、RSNとの支援を含め、PCSAの大衆の視点に立った取り組みに共感する言葉として、

「ゴルフコースも、風も、体調も、スイングも、そして人生も、すべては刻一刻と変わっていく。その中で自分に何が出来るか。毎日「今」にベストを尽くすしかない」「プロゴルフアーのトム・ワトソン氏と30年余キヤディを努めたブルース・エドワード氏との語録を紹介して、より良い業界づくり(意識)に一体感を醸した。